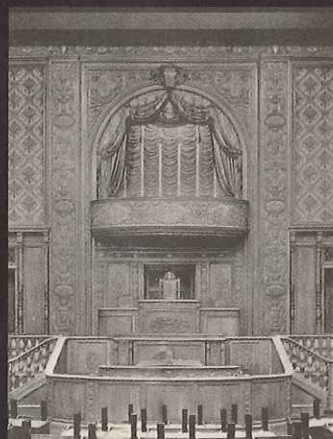


モダニズムから超国家主義まで
昭和戦前期建築の〈百科事典〉
待望の復刻



復刻版 1925-1944

新建築

巻数—全46巻・別冊1(全11回配本)

別冊—解説・総目次・索引

解説—石田潤一郎(京都工芸繊維大学教授)

揃定価—本体900,000円+税

刊行—2006年11月刊行開始

不二出版

日本の近代建築とモダンデザインの歴史の重要な情報源

藤田治彦（大阪大学大学院文学研究科教授）

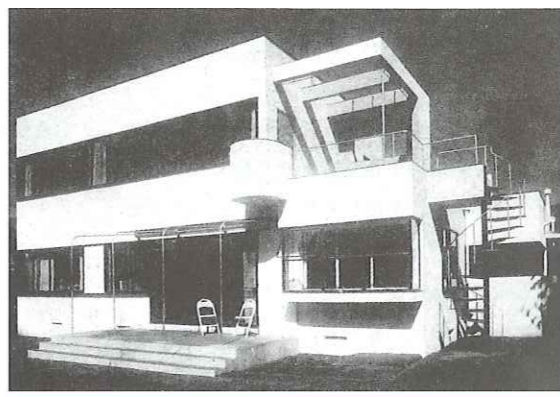
『新建築』が創刊されたのは一九二五（大正一四）年の八月である。一九二五年といえば、それまで古都ヴァイマルにあったバウハウスが、新興産業都市デッサウに移り、ヴァルター・グロピウスによる新校舎が建設される年である。グロピウスやモホリ・ナギらの主導による、より近代的な造形教育への展開は、ヴァイマル時代の一九二三年ぐらいいからかなり本格化していたとはいえ、一九二五年のデッサウ移転は、私たち、近代建築・モダンデザイン・モダンアートの研究者にとっては一つの画期をなしている。ドイツ中心の見方になるが、一九二三年のバウハウス展覧会からヴァイセンホフ住宅博・住宅展までの五年間が、あるいは家具のデザインにも注目するデザイン史研究者にとっては、マルセル・ブロイヤーの《B3・ヴァシリ》をはじめ、《B35》や《B64・チェスカ》、ミース・ファン・デル・ローエの《MR10》、ルネ・エールプストの《シエーズ・サンド》、そして、ル・コルビュジエ、ピエール・ジャヌレ、シャルロット・ペリアンによる《ジェーズ・ロング》や《可動背もたれ肘掛け椅子》といったモダンチェアの代表作が一応出揃う一九二八年までの六年間が、近代建築・モダンデザインの最高の高揚期であり、一九二五年はその象徴的な頂点であった、ということも言えるだろう。

パリで「現代装飾美術・産業美術国際博覧会」が開催され、ル・コルビュジエのレスブリ・ヌーヴォー館をはじめとする先進的なパヴィリオンがいくつかに建設された。と同時に、この「アール・デコ博」としても記憶されるこの博覧会は、バウハウスやリュリスムとは対照的な、「非装飾」「反装飾」ではなく、やはり全世界に広がった「新しい装飾」「現代装飾」の一つの頂点でもあった。この動向の一部は、一九二八（昭和三）年、東京で、フランスの装飾美術家協会の展覧会として直接に紹介されている。

さて、このような一九二五年という画期的な年に創刊された『新建築』は、先ず第一に、「近代建築」と「新しい装飾建築または建築装飾」の日本における展開を知る上での貴重な史料、まさに一次資料である。また、『新建築』は、装飾的・非装飾的を問わず——その誌名通り——新しい建築のジャーナルであっただけではなく、日本では一時代遅れて始まった、世界的な新古典主義的傾向や、さまざまな地方様式の世界拡大などについても、そこから私たちが多くを知ることのできる、幅広い内容の、興味深い建築雑誌であった。

例えば、一九二九（昭和四）年の「渡辺節特集」掲載の日本銀行大阪支店（大正一五年）の図版などに接すると、日本では、マツキム・ミード・アンド・ホワイト張りの古典主義と、バウハウスやル・コルビュジエのモダニズムとが並行して実践されていたことが、実感される。同年には、関西の建築家を中心に、日本インターナショナル建築会が創設され、『新建築』六月号には「ステートメント」が掲載されている。同会は多くの海外（客員）会員を擁する、当時の日本にはまれな建築会であったが、その前年、一九二八（昭和三）年の『新建築』では、同会の客員になる人々の代表作を含め、「外国の建築」

特集が組まれていた。『新建築』は大阪で創刊された雑誌であり、それを支えた人々と、日本インターナショナル建築会周辺の人々との協力関係あり



日本近代建築の百科事典待望の復刻

藤森照信（東京大学生産技術研究所教授）



明治以後の建築雑誌や建築本を集め始めたのはもう三〇年以上も前になるが、その頃、どんな雑誌も本も作品集もただ同然で、武田五一の作品集など、京都の古書店に一冊百円で二冊も並んでおり、カワ

「昭和」を語る生活文化資料

橋爪紳也（大阪市立大学都市研究プラザ教授／建築史家）

『新建築』といえば、建築や環境デザインの専門家を志す学生たちにとって、座右にあって便利な雑誌と評価されるのではない。なによりも、著名な建築家の優れた作品が美しい写真とともに数多く紹介されている点が参考になるからだ。

もっとも大正十四年に創刊された当初は、専門家向けではなく、一般向けの雑誌であった。「創刊の辞」には「住宅研究」をその使命に掲げている。しかもほかの寄稿などから推すと、とりわけ家庭で過ごす時間が長い主婦や良家の子女などが、主な読者として想定されていたらしい。その背景には、「生活改善」を社会全体の

重要な課題ととらえる関係者の問題意識があった。自分の住まいについて、建築家や大工など専門家に一任しているようでは私たちの生活は改善されない。新築や改築の際には、誰もががおおよその平面を描き、工夫できる程度の知識を持っているべきだ。そのためには、内外の新しい設計事例、建材や防災に関する情報をできるだけ紹介することが賢明だろう。このような判断から、難しく専門家にしか理解できない論議よりも、実作の紹介や海外の話題提供に紙数を割くという編集方針が確立された。結果として『新建築』は、戦前にあって最もひろく読まれた建築誌に成長する。

『新建築』は、「昭和」と呼ばれた時代とともに歩んだ雑誌である。第二次世界大戦をはさみつつ、この国が近代化を果たし誰もが豊かな消費社会を謳歌するようになるまでの世間の変貌を、「建築」という生活文化の一面から記録している。その覆刻は建築学に貢献するだけではない。ひろく生活史や文化史に関わる学術研究にあって不可欠な文献資料である。

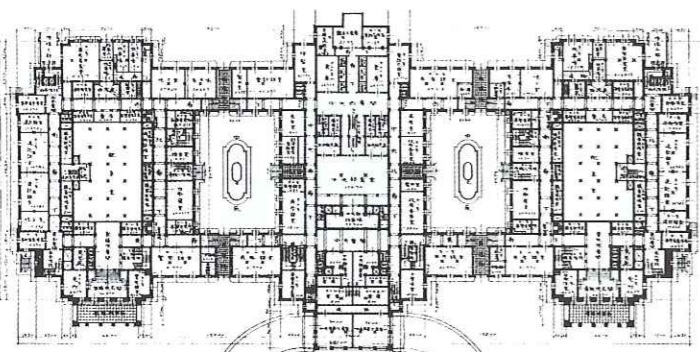
時代の断層としての集蔵体

八東はじめ

（建築家／UPM 主催／芝浦工業大学教授）

殆どの場合に、雑誌は単独の号を見る。最新号はもちろんバックナンバーであっても、必要な記事が掲載されている号のページを繰るのが雑誌の通常の読み方である。しかし、それと違う読み方は、雑誌を継ぎつなぎに見ていくやり方である。そこここに知っている作品や論文が現れたりするが、単独ではなくて、同時代の他の記事と一緒に、つまりそれが本来帰属していた時代の背景とともに現れるのだ。この時に雑誌はいわば時代の断層のような様相を呈する。

今回復刻されるという『新建築』の戦前の初巻は、昭和（厳密には大正に数カ月踏み入っているが）の激動期に対応している。建築だけをとってもいわゆるモダニズムの隆盛に重なり、社会的には徐々に大戦へ暗い影を濃くしていく時期である。ごく最初期は小さな判で、すぐに大きな判となってリーディング雑誌としての地位を確立、昭和6年の帝室博物館のコンペでは敗れた前川案を特別に取り上げて気を吐いた誌も、昭和19年の最後の諸号は見るからに物質の欠乏を証すように小さな判に戻り、12月号で消えていく（ライバルだった『国際建築』はもっと前に停刊していた）。ここでは浜口隆一の「日本国民建築様式の問題」と題する論文が4回に分けて（その4回目は小さな判だ）掲載されている。今にも消えんとするランプのようだ。その後ただの活字として再録された記事からはこの雰囲気は窺い知れない。アルシーブ（集蔵体）というものはそうしたものだだろう。



るいはライバル関係なども興味深い。一例に過ぎないが、『新建築』には、建築作品を見るだけでなく、このような、建築界の人々の動向をも読み取ることが出来る。

『新建築』は、初期から鮮明な写真や図面の掲載に力を入れていた雑誌で、それを見ると、それ以外のジャーナルに由来するおぼろげなイメージが払拭され、すでにこのような時代にあったのか、という感を強くする。その後、『新建築』は、東京に本拠を移し、戦前戦後を通じてさらに発展し、近年では日本を代表する建築雑誌 The Japan Architect として、海外でも高い評価を得ている。このたび、戦前期の『新建築』が全四六巻の復刻版として刊行されることになった。そのパランスの取れた内容と、豊富な写真や図面は、近代建築・モダンデザイン研究の一層の活性化に大いに貢献するだろう。

イソウなので買ったくらいだ。

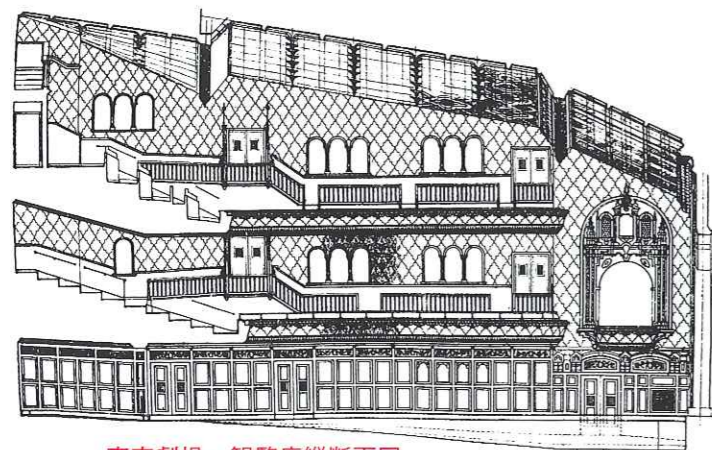
それから十年ほどしてにわかに値上がりをはじめ、その急騰ぶりに驚いた。日本の近代建築に興味を持つ人がたくさんいるとはどうしても思えないので、親しい古書店に理由を聞くと、「一般史の人や郷土史の人が、都市や建築や街並みの歴史に関心を持つようになったからだと思う」とのことだった。

以来、建築関係古書の需要が一貫して高いのはこのパンフを読むほどの人なら先刻承知にちがいないが、なかでも『新建築』の需要は高い。私はこれまでなんとか全冊を整えたいとつとめてきたが、まだかなわない。あっちの図書館こっちの文庫と足を運んで読むことはできても、どうしても手元にほしい。あれこれ調べたり考えたりしている時、ちょこちょここと雑誌を見たいのである。手元にあるとないでは、時間と精度がそうとうちがってくる。

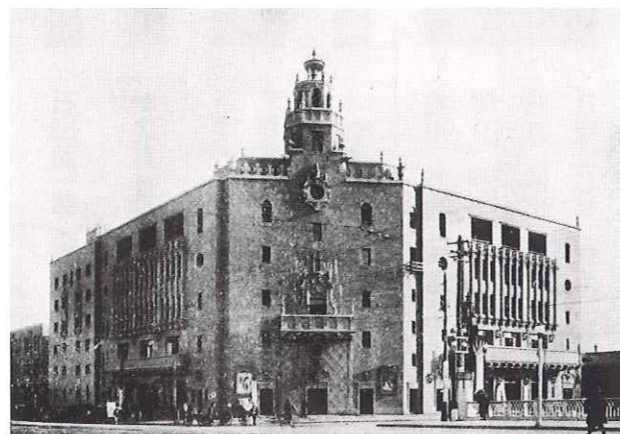
日本近代建築の百科事典とでも言うべき『新建築』が復刻すると聞いて、齢六〇の私としては、もっとはやくしてほしかった」とつぶやくしかない。

図版は右から

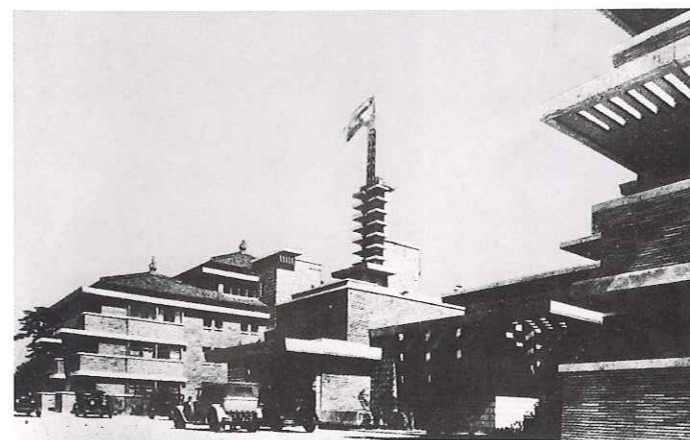
- ▼ S氏の邸、谷口吉郎設計、昭和8年・9月号
- ▼ 帝国議会議事堂・中央広間、隈研吾設計、昭和11年
- ▼ 同議事堂・一階平面図、いずれも昭和11年連載



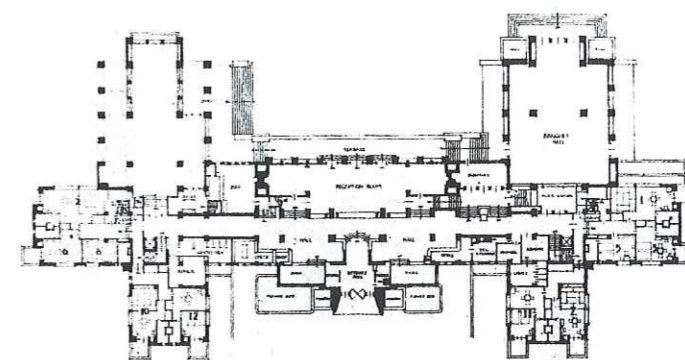
東京劇場・観覧席縦断面図



東京劇場 (大林組設計施工, 昭和5年・6月号)



甲子園ホテル (遠藤新設計, 大林組施工, 昭和5年・7月号)



甲子園ホテル・1階平面図



京都宝塚劇場 (竹中工務店設計施工, 昭和10年・12月号)



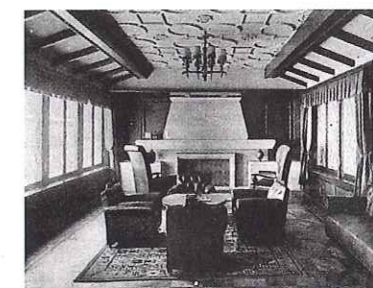
小倉郵便局内部 (笹川慎一設計, 大正14年・11月号)



白木屋・南西側外観 (石本喜久治設計, 昭和6年連載)



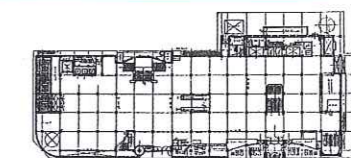
白木屋・入口前



白木屋・6階貴賓室



白木屋・7階ホール横の歩廊



白木屋・1階平面図



白木屋・7階休憩室

移動臺所の工夫に就いて

京大教授 武田五一

左の見本は原本を35%に縮小

不思議な名稱であるが誰れかこんな名前を付けてしまったので其れを用ゆることとする、それは外國で Kitchenette 又は Kitchen Cabinet と稱するもので近來アパートメント生活が盛んになり、狭い場所でも便利な臺所が必要となつて來て、且つ開けた御婦人が次第々々に學校で卒業してお嫁にでも行くよふになる、自分自分少人数の家族の炊事をして見なくてはならないのは人情であり、亭主にして見ても最愛の妻君のお料理の餘地は炊事場より外にはなくかつ

けて呉れど、可愛い勞作作場が家庭内にも起つて來た今日では、なるべく家族食事をしながら食堂で妻君が給仕半分に料理をして、一家の楽しい食事をなしてはならない時代となつて來たのである、此場合の置水屋のよふな臺所の役目をする戸棚のものを Kitchenette 文字通り「追々」住宅の建坪が狭くなり結果住居をする家を狭くすることは苦痛であり、便所も浴室も既に最後の狭さまで切り詰められて來た現在ではさふしても狭はめられ得る餘地は炊事場より外にはなくかつ

移動臺所の工夫に就いて

京大教授工学博士 武田五一

不思議な名稱であるが誰れかこんな名前を付けてしまふたので其れを用ゆることとする、それは外國で Kitchenette 又は Kitchen Cabinet と稱するもので近來アパートメント生活が盛んになり、狭い場所でも便利な臺所が必要となつて來て、且つ開けた御婦人が次第々々に學校で卒業してお嫁にでも行くよふになると、自分で自分少人数の家族の炊事をして見なくてはならないのは人情であり、亭主にして見ても最愛の妻君の(以下略)……大正15年1月号の記事

関連図書

建築と社会

- 全87巻・別冊1 (大正6年〜昭和30年)
- A5判・B5判・上製・総39,000頁
- ◎別冊……解説・総目次・索引 (別冊のみ分売可) 本体価格18,000円+税
- ◎解説……山形政昭 (大阪芸術大学教授)
- ◎定価……本体価格1,540,000円+税 [残部僅少]

都市創作

- 全10巻・別冊1 (大正14年〜昭和5年)
- A5判・上製・総5,284頁
- ◎別冊……解説・総目次・索引 (別冊のみ分売可) 本体価格1,000円+税
- ◎解説……堀田典裕 (名古屋大学大学院工学研究科助手)
- ◎定価……本体価格200,000円+税

新都市

- 全20巻・別冊1 (昭和20年〜昭和35年) 「復興情報」を含む
- B5判・上製・総8,900頁
- ◎別冊……解説・総目次・索引 (別冊のみ分売可) 本体価格3,000円+税
- ◎解説……越澤明 (北海道大学教授)
- ◎定価……本体価格380,000円+税

史蹟名勝天然紀念物 (大正編)

- 全3巻・付録1・別冊1
- A4判・A5判・上製・総1,510頁
- ◎別冊……解説・総目次・索引 (別冊のみ分売可) 本体価格1,000円+税
- ◎解説……丸山宏 (名城大学教授)
- ◎定価……本体価格680,000円+税 [昭和編第一期〜第4期を刊行中]

文化生活

- (文化普及会刊・森本厚吉主宰)
- 全17巻・別冊1 (1923年〜1930年)
- A5判・上製・総7,822頁
- ◎別冊……解説・総目次・索引 (別冊のみ分売可) 本体価格2,000円+税
- ◎解説……石川寛子 (元武蔵野女子大学教授)
- ◎定価……本体価格255,000円+税

復刻版概要

新建築

巻数

全46巻・別冊1



体裁

A5判 (1巻〜10巻)
A4判 (11巻〜45巻)
B5判 (46巻)
上製本・クロス装
写真IIコート紙使用
本文IIクリームキンマリ(中性紙)使用

頁数

総約三三〇〇頁

別冊

解説・総目次・索引
ISBN978-4-8350-6057-6
(別冊のみ分売可II本体二〇〇〇+税)

解説

石田潤一郎 (京都工芸繊維大学教授)

原本発行

新建築社

原本提供

新建築社
京都大学大学院工学研究科建築系図書室

揃定価

本体九〇〇、〇〇〇円+税

推薦

橋爪 紳也 (大阪市立大学教授)
藤田 治彦 (大阪大学教授)
藤森 昭信 (東京大学教授)
八束はじめ (芝浦工業大学教授)

復刻版
巻数

原本巻号

原本発行年月

年配本

第1回配本

第1巻	第1巻1〜4号	大正14年8〜11月
第2巻	第2巻1〜4号	大正15年1〜4月
第3巻	第2巻5〜12号	大正15年6〜12月
第4巻	第3巻1〜3号	昭和2年1〜3月

ISBN4-8350-6000-8

2006年11月
60,000円+税

二〇〇六年年度合計・本体八〇、〇〇〇円+税

第2回配本

第5巻	第3巻5〜8号	昭和2年5〜8月
第6巻	第3巻9〜12号	昭和2年9〜12月
第7巻	第4巻1〜5号	昭和3年1〜5月
第8巻	第4巻6〜12号	昭和3年6〜12月
第9巻	第5巻1〜12号	昭和4年1〜12月
第10巻	第6巻1〜12号	昭和5年1〜12月

ISBN978-4-8350-6005-7

2007年4月
84,000円+税

第3回配本

第11巻	第7巻1〜6号	昭和6年1〜6月
第12巻	第7巻7〜12号	昭和6年7〜12月
第13巻	第8巻1〜6号	昭和7年1〜6月
第14巻	第8巻7〜12号	昭和7年7〜12月

ISBN978-4-8350-6012-5

2007年8月
84,000円+税

第4回配本

第15巻	第9巻1〜6号	昭和8年1〜6月
第16巻	第9巻7〜12号	昭和8年7〜12月
第17巻	第10巻1〜6号	昭和9年1〜6月
第18巻	第10巻7〜12号	昭和9年7〜12月

ISBN978-4-8350-6017-0

2008年1月
84,000円+税

二〇〇七年年度合計・本体一五二、〇〇〇円+税

第5回配本

第19巻	第11巻1〜4号	昭和10年1〜4月
第20巻	第11巻5〜8号	昭和10年5〜8月
第21巻	第11巻9〜12号	昭和10年9〜12月
第22巻	第12巻1〜4号	昭和11年1〜4月

ISBN978-4-8350-6022-4

2008年4月
84,000円+税

復刻版
巻数

原本巻号

原本発行年月

年配本

第6回配本

第23巻	第12巻5〜8号	昭和11年5〜8月
第24巻	第12巻9〜12号	昭和11年9〜12月
第25巻	第13巻1〜4号	昭和12年1〜4月
第26巻	第13巻5〜8号	昭和12年5〜8月

ISBN978-4-8350-6027-9

2008年8月
84,000円+税

第7回配本

第27巻	第13巻9〜12号	昭和12年9〜12月
第28巻	第14巻1〜4号	昭和13年1〜4月
第29巻	第14巻5〜8号	昭和13年5〜8月
第30巻	第14巻9〜12号	昭和13年9〜12月

ISBN978-4-8350-6032-3

2009年1月
84,000円+税

二〇〇八年年度合計・本体一五二、〇〇〇円+税

第8回配本

第31巻	第15巻1〜4号	昭和14年1〜4月
第32巻	第15巻5〜8号	昭和14年5〜8月
第33巻	第15巻9〜12号	昭和14年9〜12月
第34巻	第16巻1〜4号	昭和15年1〜4月

ISBN978-4-8350-6037-8

2009年4月
84,000円+税

第9回配本

第35巻	第16巻5〜8号	昭和15年5〜8月
第36巻	第16巻9〜12号	昭和15年9〜12月
第37巻	第17巻1〜4号	昭和16年1〜4月
第38巻	第17巻5〜8号	昭和16年5〜8月

ISBN978-4-8350-6042-2

2009年8月
84,000円+税

第10回配本

第39巻	第17巻9〜12号	昭和16年9〜12月
第40巻	第18巻1〜4号	昭和17年1〜4月
第41巻	第18巻5〜8号	昭和17年5〜8月
第42巻	第18巻9〜12号	昭和17年9〜12月

ISBN978-4-8350-6047-7

2009年11月
84,000円+税

第11回配本

第43巻	第19巻1〜6号	昭和18年1〜6月
第44巻	第19巻7〜12号	昭和18年7〜12月
第45巻	第20巻1〜4号	昭和19年1〜4月
第46巻	第20巻5〜10号	昭和19年5〜12月

ISBN978-4-8350-6052-1

2010年2月
84,000円+税

二〇〇九年年度合計・本体三三六、〇〇〇円+税

不二出版

〒113-0023 東京都文京区向丘 1-2-12
TEL 03-3812-4433 FAX 03-3812-4464
振替 00160-2-94084

*表示価格はすべて税別

表紙の写真は「岸記念体育会館」(昭和16年5月号)、「帝国議会議事堂・衆議院議場正面」(昭和11年・連載)